

二〇一三年九月二十五日(奈良公園参加者二名)

秋の空めざして登る若草山	きづな
そこここに木の実散らばる春日道	"
遠望の大和三山豊の秋	"
法師蝉かけあひで啼く下向道	"
薄原若草山の天辺に	わかば
秋天へ飛簷重ねて五重塔	"
きちきちや若草山を斜滑降	"
唐風の御堂の屋根に小鳥来る	つくし
松が枝に透ける九輪や秋の晴	"
秋思あり発掘調査穴数多	"
天平の衣裳のガイド古都の秋	ひかり
参道の秋日に傾ぐ灯籠かな	"
澄む水を一擲したる鷺の嘴	"
鱗雲若草山を覆いけり	菜々
玉砂利に紛れ散らばる木の実かな	"
色変へぬ松を裳階に五重塔	"
風の萩乱れに乱れ磴隠す	宏虎
ささやきの小径に恋の鹿屯	こすもす

神苑に角突き合はす奈良の鹿	"
秋雲の白さの映ゆる鏡池	ぼんこ
頭突きせる角を切られし鹿二頭	せいじ
秋日濃し直哉旧居の葺戸に	満天
秋天下若草山のまるしかな	はく子
鹿老いて神の大樹を抛りどとす	"
色変へぬ松の傾く大鳥居	"

吟行句会みのる選

二〇一三年九月二十五日(奈良公園参加者二名)